阿闍梨の法力に肉薄する

ユング心理学の枠組みに照らして内在的理解の方法を採用

串崎真志

老松克博 著
▶法力とは何か
「今空海」という衝撃
2・15刊 四六判256頁 本体2400円
法藏館

本書は真言宗のある阿闍梨（傳燈大阿闍梨）に、二〇一七年から数年間にわたり、三〇回近く六〇時間におよぶインタビュー、そして現地調査を行い、それらの逐語録をもとに法力のエピソードについて再構成したものである。法力とは、仏法の修行によって得られた力をいう。この種の話は、ともすれば真偽はいかがかと興味本位で語られ、過剰に称賛されるか、または全否定されることに陥りやすい。

著者の老松克博氏はそれを避け、客観性を担保しつつ、深い理解を行うため、内在的理解という方法を採用した。これは、「語り手の心的現実（主観）を尊重しながら、深層心理学による事例検討的な解析を行なう」（一二頁）というものである。学術研究としての倫理に従って、当事者・関係者のプライバシーを守り（阿闍梨の名前も明かされていない）、本書の初稿を本人に校閲してもらうなど、より正確な記載が期されている。

本書の特色は、老松氏が仏教学者や宗教学者ではなく、ユング派分析家の資格をもつ精神科医であるという点だろう。ユング派分析とは、スイスの精神科医カール・グスタフ・ユングの創始した深層心理学に基づく心理療法を指す。ユングは、私たちの無意識に備わっている創造性や宗教性に注目し、そこには超越的な力さえ存在すると考えていた。

老松氏は、阿闍梨の法力をユング心理学の枠組みに照らして理解することで、心の深層にある超個人的で普遍的な本質を明らかにし、それを人間の変容や成長の原動力として捉え、私たちの経験の可能性を示唆することを目指している。本書には詳しく述べられていないが、法力に関する知見は、トラウマ（心の傷）を負った人たちがたどる心のプロセスの理解にも役立つようだ。

このように書くと、本書の内容はいかにも難解と思われたかもしれない。しかし、そのような心配はまったく不要である。真言宗についてのさまざまな事項は、必要に応じて本文中に解説されている。ユングの心理学に関しても、第五章を中心にわかりやすく整理されており、予備知識なしで読み進めることができる。何よりも、「はじめに」の後半「阿闍梨に会いにいく」以降は、老松氏の経験も交えた的確で精確な描写と、味わいのある文章に、読者は法力の世界にぐんぐん惹き込まれ、全篇を一気に読み通すことになるだろう。

評者（串崎）も、まさしくそうであった。それは上質のドキュメンタリー作品に立ち会っているようでもあり、ある種の旅路の物語を読み進めているようでもあった。もちろん、法力を学術的に論考している部分もある。これらの混合した不思議な気持ちになった。和尚（阿闍梨は本書では「和尚」と呼ばれる）の生き方や世界観に共鳴したためか、評者は読了後、絶対肯定の慈悲の世界にしばらく深く沈潜し、そののち、すがすがしく晴れやかな気分になった。老松氏の巧みな筆運びが、私にそのような経験をもたらしたのかもしれない。そのような仕掛けも含めて、本書は法力に肉迫するものとなっている。

「法力とは何か」に関する老松氏の答えは、「ほんとうの自然」の再生である。自然を分化させる因果性と、細分化のないネットワークにまとめ直す共時性の二つを、直接的に経験すること（高次の融即）によって、全体性の成就することである（二三四頁）。これを老松氏は「天衣無縫」という言葉で表している。

「天人の衣には縫い目がないというが、一度は裁たれた無限に広がる永遠の生地（きじ）が、そのとき、すべての接点で無媒介に結ばれてこの世のものとなるにちがいない」（二三四頁）。したがって和尚の語りには、「憑き物」や「霊の祟り」といったことが、ほとんど出てこない点も強調しておきたい。老松氏によると、それらは意識と無意識の分化を導く実践に相当するという（二三三頁）。

それでは、和尚の日々の実践とはどのようなものか。第四章「教えと行」がその一端を伝えている。老松氏が深夜の内護摩（ないごま）に、同座させてもらったときのこと。「朝晩の勤行のときと同様、蝋燭の薄明かりのなかに半跏で座っている和尚にはほとんど動きがなく、上体がときにわずかに揺れたり傾いたりする程度である」（九八頁）。続く和尚の言葉が興味深い。

「外から見ていると、いつもとそれほどちがわないと思いますが、見た目は同じようでもちがう拝み方をしてます。この拝み方をするときには、自分が金剛杵になって、地下の火の海に降りていって鎮める。大地の神々にぶつかっていって、静かにしてほしいとお願いするの」（九八頁）。

老松氏はそのとき、「坐の下からもうもうたる蒸気と無数の龍が立ち昇ってくるヴィジョンに捕らえられた」という。和尚は「大きな欲」と呼ぶが、つまり、「国と国民の安寧を願ってのことで、とりわけ巨大地震など自然災害の発生をくいとめたり、被害を最小限に抑えたりするのが目的となっている」（九八頁）のだ。評者も、その法力のスケールに改めて感嘆した。

本書は、仏教や心理学の関係者だけでなく、法力という「不思議な」現象に関心をもつ一般の皆様にも、ぜひお薦めしたい。そして老松氏による『武術家、心・身・霊を行ず』（遠見書房、二〇一七年）は、ある武術家をインタビューしたもので、本書と同じ意義をもつ。こちらも併せて一読されたい。

（関西大学文学部教授）